

8月24日（日）今日から山小屋2泊、3日間の縦走が始まる。



タンテ峠 Col de Tentes の駐車場からハイキングがスタートする。ガイドが写真中央のピエール（英語：ピーター、スペイン語：ペドロ）に代わる。フランス人の父親がヴェネズエラで現地の女性と結婚し、彼が生まれた。その後家族でフランスに戻り、現在に至る。南米人の血が混ざっているだけに、陽気で機知に富んでいる。3日間、数々のユーモアで我々を楽しませてくれた。（写真別途）

巡礼街道のルートを示す、ほたて貝の貝殻マーク



タンテ峠から45分程でフランス・スペイン国境のバウチャロ峠 2273m（上）に到着する。この先はスペインで巡礼街道に通ずる。巡礼の目的地であるサンティアゴ・デ・コンポステーラは大西洋に近く、ほたて貝が採れることから、貝殻マークが道標に使われている。サンティアゴ・デ・コンポステーラはローマ、エルサレムと並ぶキリスト教の3大巡礼地の1つで、イエスの十二使徒の1人聖ヤコブ（スペイン語でサンティアゴ）の遺骸があるとされている。巡礼街道はスペイン語で El Camino（道） de Santiago と呼ばれる。我々は「ローランの裂け目」で国境越えをするため、この道標の左へ向かってフランス側を進む。



左：パウチャロ峠は風が吹き抜ける場所で、大野さんの帽子が吹き飛ばされてしまった。ガイドのピエールが拾いに行ったが、「下に落ちてしまった」と言って帰ってきた。

そして隠し持っていた帽子を大野さんに差し出し 一件落着。 役者やな～

右：北名古屋市の男性（単独行）とすれ違う。彼はガバルニーまで歩いて下るという。

「ピレネー山脈はどのようにしてできたのか」という横塚さんの質問に対し、ピエールはこう答えた。「Good question、大古の昔イベリア半島はアフリカ側にあったが、プレートの移動（隆起？）でユーラシア大陸とぶつかり合い盛り上がったのがピレネー山脈です。だから高地でも海の生物の化石が見つかるのです。」 池上彰みたいだ。

昼食風景、好天の下 正に至福のときである



サラドゥ峠 Col des Sarradets まで登ると、宿泊するサラドゥ小屋は目の前にある。左の窪んだところが昨日行ったガバルニー圏谷で、大滝が細く見える。左からぐるりと下を大廻りして、ほぼ一周したことになる。



左：小屋から見上げるローラン
の裂け目、標高差 220m
下：ローラン勇士が宝剣を岩に
たたきつける場面（伝説）



夕食風景 と 祓詞「かけまくもかしこき・・・」で安全祈願する牧原さん。この旅行記を読んでいるだろう彼女のお兄さんへ「筆者が妹さんに催促したわけではなく、この場の成り行きですのでご了承願います。」



本日 8/24は 宇野さんのご主人（〇〇歳）と 筆者・浅野（72歳）の誕生日である。その前後の田中さん 8/21、小林さん 8/31も併せた4人の誕生日を祝って、みんなで Happy Birthday to You を歌った。ただし歌だけで、ケーキもプレゼントもなかった。そのすぐあと、山小屋のスタッフ（写真）が オーシャンゼリゼを日本語で 歌ってくれたのには感激した。ここはまだフランスなのだ。



♪♪ 街を歩く 心軽く 誰かに会える この道で
可愛い君に 声をかけて こんにちは僕と 行きましょう
オーシャンゼリゼ オーシャンゼリゼ
いつも何か すてきなことが あなたを待つよ シャンゼリゼ ♪

夕食後のひととき 小林さんとフランス人？登山者



♪ ♪ 親の血をひく 兄弟よりも かたい契りの 義兄弟

こんな小さな 盃だけど 男いのちを かけて飲む ♪

「兄弟仁義」歌：北島三郎

そろそろ就寝の時間となった。最後にサラドウ小屋の様子を紹介しよう。左は3段ベッド、赤沼さんが「日本人は背が低く、上がるのが大変だから一番上の段は避けてくれと依頼」、右は元祖水洗便所、使用後ポリバケツに水を入れて流す。右下は見苦しいのでカットした。



サラドウ小屋 Refuge des Sarradets 泊